ラスカリス王朝(ニカイア帝国)の皇帝交替問題

杉 村 貞 臣^{*}

ABSTRACT Sadaomi SUGIMURA, *The succession to the throne in the Dynasty of Lascaris, Nicean empire: how the five emperors in the Dynasty of Lascaris (1204–1261) succeeded to the throne is discussed here. The succession by the blood relation as Theodoros I, Theodoros II, John IV, and the succession by the marriage as John III, continued the family line of Lascaris. But a usurpation by Michael VIII has gone to ruin the family of Lascaris. The patriarch and the aristocracy in Nicaea supported the family line of the dynasty.*

序 言

ラスカリス王朝とは、1204年から1261年までニカイアを首都とし、小アジア西部に領域をもつ国家を統治した王朝である。この国家は、13世紀にはローマ帝国とも呼ばれていたが、後世の研究者により首都にちなんでニカイア帝国とも呼ばれる(次頁の地図参照)。

このラスカリス王朝は、歴史の流れのなかでは、ビザンティン帝国史(324—1453年)のなかで、ひとつの時代として扱われている。⁽¹⁾ビザンティン帝国はコンスタンティノポリスを首都として存在してきたが、1204年第4回十字軍によってそのコンスタンティノポリスが占領された。第4回十字軍は、1203年7月にすでにコンスタンティノポリス周辺に到着していたが、1204年4月都内に総攻撃を加え、同月12日夜皇帝アンゲロス王朝のアレクシオス5世(1204年)は都を脱出した。⁽²⁾その直後コンスタンティノポリスでは、ラスカリス家のコンスタンティノス11世がくじびきによって皇帝にえらばれたのである。⁽³⁾しかしそのコンスタンティノス11世も、十字軍の攻撃に耐え切れず、翌13日早朝都を脱出し、いったんブルサへ落ちのびた。なおコンスタンティノポリスでは、ボードワン1世が即位し、いわゆるラテン帝国が形成された。そしてボードワン1世は、コンスタンティノス11世追討を企てブルサ攻撃を試みたので、ラスカリス家は1205年都をニカイアに移した。このようにラスカリス王朝は、現職皇帝の

* 関西学院大学文学部教授

ニカイア帝国

(出典) 梅田良忠編『東欧史』山川出版社 1958年102頁。

コンスタンティノポリス脱出という異例の事態をもって発足した。

そのラスカリス王朝はニカイアに都をおきながら、開祖コンスタンティノス11世(1204—1205)からテオドロス1世(1205—1222年)、ヨハネス3世ドウカス・ヴァタツェス(1222—1254年)、テオドロス2世(1254—1258年)を経て、ヨハネス4世(1258—1261年)に至るまで、5人の皇帝で形成された。そして1261年パライオロゴス家のミカエル8世がコンスタンティノポリスを奪回し即位したのををもって、ラスカリス王朝は終わった。なお1261年をもってラテン帝国も滅亡したので、その後にはコンスタンティノポリスを首都とするビザンティン帝国が復活したと考えられている。

したがってラスカリス王朝ニカイア帝国は、西側のラテン帝国およびその支配下に現われたテッサロニキ王国、アテナイ公国、アカイア大公国と対比する形で、その概要が捉えられてきた。⁽⁴⁾ニカイア帝国の国家体制については、まず民族構成の立場から国内にギリシア人に加えてスラヴ人が7世紀以来断続的にはあるが長期にわたり混入したこと⁽⁵⁾ 諸皇帝がおこなった農業政策と国家体

制の一面をうかがわせるプロノイア制⁽⁶⁾ ニカイアの宮廷を中心に展開した文化⁽⁷⁾などが考察され、ニカイア帝国の歴史像を捉えることは可能である。

しかしここで考えねばならないのは、もっとも初歩的な問題である。すなわちコンスタンティノポリスを追い出されるようにして小アジア側に来たコンスタンティノス11世の子孫が、その後5代57年余にわたりラスカリス王朝の名のもとに、ニカイア帝国を統治できたのはなぜかという問題である。もちろんそこには各政策を施した諸皇帝個人の才能があり、またかれらを支えた軍隊・官吏・貴族などの存在を忘れてはならない。しかしある皇帝が死ぬと、次になぜラスカリス家から皇帝が出たのか、またそのようなことを支えたのは何か、といったことも考えねばならない。つまり皇帝が交替するときに生じるさまざまな問題である。するとラスカリス王朝はなぜヨハネス4世をもって終わったのか、という問題もおこる。本稿ではラスカリス王朝に5回おこった皇帝交替を、連続して考察することによって、ニカイア帝国の一側面をみたい。

ラスカリス王朝時代に関する史料については、すでにオストロゴルスキーが概説しているが、⁽⁸⁾本稿ではおもに次の二つを利用したい。ひとつはフリュギア地方出身のニケタス・コニアテス⁽⁹⁾（1150年頃—1213年）が著した「歴史」である。かれは1189年第3回十字軍がバルカンを通過した時にフィリップポリスで軍司令官を勤めたあと、コンスタンティノポリスで高官を歴任し、13世紀初めに著作を残した。そこには1118年から1206年までのビザンティン帝国史が扱われ、とくに第4回十字軍のコンスタンティノポリス攻撃とその直後の事情が詳述されている。他のひとつはヘラクレイア出身のニケフォロス・グレゴラス⁽¹⁰⁾（1295年頃—1360年頃）が著した「ビザンティン（ローマ）史」（37巻）である。そこには1204年から1359年までの期間の歴史が扱われ、ラスカリス王朝時代の記述はその著作の初めの部分にみられる。

I. コンスタンティノス11世ラスカリスよりテオドロス1世ラスカリスへ（1205年）

コンスタンティノス11世を追討するため、ラテン軍は、ボードワン1世の弟ヘンリーが中心となり、1204年11月ダーダネルス海北岸のガリポリスに集合し、海峡を渡り南下して1205年2月にはアトラミュティオンに到着した。そのごかれらはブルサの攻撃を試みたが、ブルサ側の抵抗が強く占領できなかった。⁽¹¹⁾しかしニケタス・コニアテスはこの年に関してコンスタンティノス11世の名を残

していないが、その代りラスカリス家のテオドロス1世が1205年夏に、赤色のバスキン（厚底の半長編上げ靴）を履き、全ての東方の市からローマ人の皇帝即位を宣言されたことを述べている。ここにいう「東方」とは、かつてビザンティン帝国領域に入っていた東側、すなわちニカイア帝国の領域である。コンスタンティノス11世の名はその後にも現われない。これについては、コンスタンティノス11世は1205年に死亡したと推定されている⁽¹²⁾。したがって1205年に、コンスタンティノス11世からテオドロス1世ラスカリスへと皇帝が交替したと考えられる。なおテオドロス1世は、1208年3月ミカエル4世アウトリアノスをニカイアで総主教に任命し、かれより戴冠された。今回の皇帝交替の意味を理解するにあたっては、次の2つのことを考えねばならない。

第1は、テオドロス1世の係累関係である。ラスカリス家の起源についてはかならずしも明かでないが⁽¹⁴⁾、家系図においてはテオドロス1世には兄としてマヌエル、ミカエル、コンスタンティノス11世、弟としてアレクシオスとイサキオス⁽¹⁵⁾がいた。したがってテオドロス1世は、さきのコンスタンティノス11世の弟であり、今回皇帝位は兄から弟へ相続されたと考えられる。しかしテオドロス1世の係累関係でさらに重要なことは、かれがアンゲロス王朝アレクシオス3世（1195—1203年）の二女アンナと、1199年あるいは1200年頃に結婚していたことである⁽¹⁶⁾。すなわちテオドロス1世は、この結婚の時点においてアレクシオス3世の義理の息子となり、またさきのアレクシオス5世の義兄にあたった。この点に注意すると、ラスカリス王朝はアンゲロス王朝と家系上連続していたともいえる。こうした王朝間の家系連続は、すでにイサウリア王朝とアモリア王朝との間で⁽¹⁷⁾、アモリア王朝とマケドニア王朝との間で⁽¹⁸⁾みられたが、今回も同じことが指摘できよう。このテオドロス1世が前皇帝家と結婚により結びつきがあったことは、同時代のニカイアをはじめ帝国各地でかなり知られていたようである⁽¹⁹⁾。なればこそニカイア帝国各都市はテオドロス1世を皇帝として認めたのであった。こうしてみるとテオドロス1世が1205年に即位したのは、前帝コンスタンティノス11世の弟であったこと、アレクシオス3世の娘の夫であったことをまず留意しておかねばならない。

第2は、テオドロス1世の総主教による戴冠である。コンスタンティノポリスではレオ1世（457—474年）が総主教により戴冠されたが、この行事はとくに7世紀以降皇帝即位の際に聖ソフィア寺院でおこなわれるのが慣例になった⁽²⁰⁾。この慣例にしたがえば、テオドロス1世も総主教より戴冠されねばならぬとこ

ろであるが、1204年コンスタンティノポリスの総主教ヨハネス・カマテロス⁽²¹⁾はマリツァ河畔のディディモティコスに避難していた。テオドロス1世はかれをニカイアへ招き、戴冠させようと企てたが、ヨハネスは1206年6月26日にディディモティコス⁽²²⁾で死亡した。そこでテオドロス1世は、総主教の空位を埋めるためあらたに人選に入ったが、ミカエル・アウトリアノスを総主教に選んだ。そしてミカエル・アウトリアノスは、1208年テオドロス1世にニカイアで戴冠⁽²³⁾した。この時点をもってテオドロス1世は、1204年までコンスタンティノポリスに伝っていた総主教による戴冠を果し、その意味では正式に皇帝になったとも考えられる。しかし実質的にはテオドロス1世の即位は、1205年とみるのが妥当である。つまりテオドロス1世が、ヨハネスの死亡後、あえてニカイアにミカエル・アウトリアノスを総主教に任命し、かれより戴冠させたのは、みずからをかつてのコンスタンティノポリスにおける皇帝の直接後継者を自認したためと考えられる。

要するにテオドロス1世は、自分が結婚を通してアングロス家とつながりをもっていたところへ、兄コンスタンティノス11世より皇帝位を継承したのだが、この係累関係をさらに国制面から強化させる意味において、ニカイアに総主教座を新設し、その総主教より戴冠させたのである。換言すればテオドロス1世は、コンスタンティノポリスを離れたとはいえ、前王朝との家系連続と総主教座の新設とによって、従来のビザンティン帝国との連続性を、その即位において示そうとした。

II. テオドロス1世ラスカリスよりヨハネス3世ドゥカス・ヴァタツェスへ (1222年)

テオドロス1世は、西側でラテン帝国と対立すると同時に、東側でもルムのスルタンとも対立した。スルタンは1211年ニカイア帝国領域の南部へ侵入したが撃退されたので、テオドロス1世は勢力を西方へ向け、海軍を建設してコンスタンティノポリス奪回を計画したが失敗した⁽²⁴⁾。しかしニカイア帝国は、1214年ラテン帝国と協定を結び、小アジア北西部における両国国境線を画定した⁽²⁵⁾。またテオドロス1世は、1219年にヴェネツィアとも通商協定を結び、ヴェネツィア商人のニカイア帝国領内における商業活動を認めた⁽²⁶⁾。

このようにテオドロス1世は、外交面で活躍しニカイア帝国の安泰を保つため努力したが、1222年初めに死亡した⁽²⁷⁾。そして次の皇帝としてヨハネス3世ド

カス・ヴァタツェス⁽²⁸⁾が即位した。このテオドロス1世からヨハネス3世への皇帝交替については、次の3つの点を考えねばならない。

第1は、テオドロス1世とヨハネス3世との関係である。テオドロス1世は、その生涯において3回結婚した。その最初の妻アンナ（アレクシオス3世アンゲロスの二女）との間にイレネ、マリア、エウドキア、ニコラスおよびヨハネスの二男三女の子供があった。そしてテオドロス1世は1214年、キリキアにおける小アルメニア王レオ2世の姪フィリップと結婚し、⁽²⁹⁾かの女との間に息子コンスタンティノスが生まれた。ただし今回の結婚は1年後に解消され、そのあとテオドロス1世はラテン帝国4代目の皇帝ヨランデ（1217—1219年）の娘メアリと結婚した。⁽³⁰⁾ただしメアリとの間には子供はなかった。以上テオドロス1世には3人の妻から6人の子供があったが、ヨハネス3世は、テオドロス1世の最初の妻アンナの娘イレネの夫であった。⁽³¹⁾すなわち今回皇帝位は、親から娘の夫へ移ったのである。さきのコンスタンティノス11世からテオドロス1世への皇帝交替が兄弟間の血統相続と呼ぶならば、今回のそれは皇帝位の縁組相続であったといえよう。この時点でニカイア帝国の皇帝位は、実の親子あるいは兄弟間という「血のつながり」のある者に移るとは、かならずしも言えないことが指摘される。

第2は、ヨハネス3世が選ばれた理由である。ヨハネス3世は1193年生まれといわれているので、即位当時は29才であった。即位当時のかれには、妻イレネとの間に息子テオドロス（1221年生れ）⁽³³⁾がいた。しかしヨハネス3世の生いたちについては詳細が知られていない。ただかれはニカイア帝国時代におけるもっとも重要な政治家であり、また才能と勢力の持ち主であったと評価されている。⁽³⁴⁾そして今回ヨハネス3世を即位させたのは、ニカイア帝国にとって賢明な選択であったともいわれる。⁽³⁵⁾ただ今回の場合イレネの兄弟であるニコラスとヨハネスの生存の有無が問題となる。かりに両名が生きておれば、ヨハネス3世の即位は皇帝交替において血統より人物の才能が重視されたといえよう。また両名が死亡していたとすれば、テオドロス1世は娘3人の結婚相手のなかから1人を選び、その人物に次期皇帝位を託したことになる。つまりラスカリス家にとっては、外部から優秀な男性を招いて、皇帝位を自分の家系内で継がせたのである。

第3は、テオドロス1世の弟による反乱⁽³⁶⁾である。すなわちアレクシオスとイサキオスの2人は、ヨハネス3世の即位の妨害を試みたが失敗し、ラテン帝国

へ脱走した。そしてラテン皇帝ロベルトに対し、ニカイア帝国へ戦争を仕掛けるよう要請した。ラテン帝国は軍団を小アジアへ派遣したが、1225年ポイナメノンの戦いでニカイア帝国軍に敗れた。この時の戦争でラテン帝国は、ニコメディアとその周辺地域からコンスタンティノポリス対岸のボスポロス沿岸を除く、すべての小アジア領土を失った。またニカイア帝国は、レスボス、キオス、サモスなどエーゲ海北部の諸島を獲得した⁽³⁷⁾。結局テオドロス1世の兄弟による反乱は失敗し、ヨハネス3世は自分の皇帝としての地位を堅固にし、またニカイア帝国も領域を拡大し、ラテン帝国に対して有利な立場に立つことができた。

これら3つのことを考えあわせると、今回の皇帝交替は、ラスカリス家にとって外部からの男子導入であった。そのためにラスカリス家側からの反発がおこったが、それがテオドロス1世の弟による反乱であった。しかしこの反乱は、単にラスカリス家とドゥカス家との対立を示すに留まらず、ニカイア帝国とラテン帝国との対立にまで発展していたところに意味が見出せる。つまりニカイア帝国としては、テオドロス1世の後継者として好人物を皇帝に迎えたのであったが、そのことがかえって宿敵ともいえるラテン帝国をもあらたに対立者としてまきこんでしまったのである。

III. ヨハネス3世ドゥカス・ヴァタツェスよりテオドロス2世ラスカリスへ (1254年)

ヨハネス3世ドゥカス・ヴァタツェスは、セルジェク・トルコ、ラテン帝国、ハンガリー王国、ローマ教皇およびクマン人の勢力やドイツのホーエンシュタウフェン家と巧みに交わりながら、ニカイア帝国の安泰をはかった。しかしエピルスのミカエル2世とは、同じアンゲロス家とつながりのあるギリシア系国家であるため、コンスタンティノポリス奪回をめぐりかえって対立していた。ヨハネス3世は、国内政策ではとくに土地配分と農業に注目し、小アジア各地で没収した土地を皇帝に協力した者へあらためてプロノイアとして支給し、ニカイア帝国国境地帯においては兵士に土地を配分して小規模な農耕地を作らせ国境の警備を強化させた。帝はまたプレミュデスはじめ多数の文化人を宮廷に集め、ニカイアを帝国文化の中心地とした。ただ地中海商業の主導権は、第4回十字軍以後フランスやヴェネツィア人に奪われていた。⁽³⁸⁾⁽³⁹⁾

こうした業績を残したヨハネス3世は、1254年10月30日⁽⁴⁰⁾（または11月3日⁽⁴¹⁾）ニムファエウムで病死した。⁽⁴²⁾そして帝の遺体はマグネシアに埋葬された。⁽⁴³⁾なお

ヨハネス3世には半世紀後に哀悼の意が表わされた⁽⁴⁴⁾。ヨハネス3世の死後、かれの息子テオドロス2世ラスカリスが即位した⁽⁴⁵⁾。今回の皇帝交替については、まず家名問題を考えねばならない。

テオドロス2世はラスカリス家の人間として即位した⁽⁴⁶⁾。このことには次のような問題が含まれている。前節で述べたように、テオドロス2世の母イレネはヨハネス3世ドゥカス・ヴァタツェスと結婚した。そしてかの女が1221年テオドロス2世を出産した翌年ヨハネス3世が即位した。この段階でテオドロス2世が将来即位するにあたり、母方のラスカリス家に所属するのか、父方のドゥカス家に所属するのか、という家系所属問題がおこる。とくにヨハネス3世は治世中もドゥカス家の名をとまっていた⁽⁴⁷⁾ので、その息子の家名帰属は問題視されよう。しかし結果においてテオドロス2世はラスカリス家の人間であることが表明されたので、1254年の時点でニカイア帝国の皇帝位はラスカリス家に留まり、ドゥカス家には移らなかった。換言すればドゥカス家のヨハネス3世は、イレネとの結婚によって皇帝になったけれども、その家名はかれ一代限りで終り、かれの実家からは皇帝継承者は出なかった。

なおヨハネス3世は、妻イレネが1244年死亡したので、同年ドイツのホーエンシュタウフェン家のフリードリヒ2世の娘コンスタンツァと再婚し、かの女の名をアンナと改めさせた⁽⁴⁸⁾。当時ヨハネス3世が52才、アンナが12才であった。帝の再婚は、フリードリヒ2世が当時没頭していた南イタリア・シチリア経営のもとにあった、両地域のギリシア系住民の安泰をはかろうとしたものであり、またヨハネス3世がコンスタンティノポリスを奪回した時に東西両帝国間の均衡を保とうと意図したところにあった。しかしニカイア宮廷の内部では、アンナを下女同様に扱っていた⁽⁴⁹⁾。そしてかれら夫婦の年齢の差もさることながら、家系上アンナには子供が現われていない。すなわちヨハネス3世は、アンナとの再婚によりドイツとの対立緩和を計ったが、他面においてニカイア帝国の皇帝位継承者をイレネの子供一人に限り、あえてドイツ人の血が入るのを避けたとも考えられる。

なおヨハネス3世の治世中に皇帝に対する反乱は、かれの従兄弟にあたるアンドロニコス・ネストングスにより一度おこされたが、それも簡単に鎮圧された⁽⁵⁰⁾。これが唯一の反乱であり、テオドロス1世の兄弟もその後反乱をおこすことなく、またラスカリス家側からもドゥカス家側からも皇帝位継承をめぐる紛争はおこらなかった。これもヨハネス3世の人徳のしからしめるところであっ

たといえる。

とにかくコンスタンティノス11世とテオドロス1世に始まったラスカリス家の皇帝位はヨハネス3世によっていったん外部の男子に移ったけれども、開祖の孫の代になってふたたびラスカリス家の人物に戻った。テオドロス2世の即位は、皇帝の在所がコンスタンティノポリスを離れてちょうど50年目にあたる。その間皇帝をとりまく貴族も、その代がかわったとはいえ、ラスカリス家を皇帝家として支持してきた。したがって今回テオドロス2世がラスカリス家の名をとまなげて即位したことは、ニカイア帝国において皇帝位はラスカリス家になるものという観念が定着したことを物語る。またラスカリス家がさきのアンゲロス家と家系上つながっていた点に注意すれば、ニカイア帝国はコンスタンティノポリスをその領域に含まないとはいえ、ビザンティン帝国の後継であったことをとも意味する。このように考えると、テオドロス2世の即位にもあらたな意味が加えられる。

IV. テオドロス2世ラスカリスよりヨハネス4世ラスカリスへ（1258年）

テオドロス2世ラスカリスは、プレミューデスの指導を受けた知識人で、哲学や神学に関する書簡を残したが⁽⁵¹⁾、行政面では友人ゲオルギオスを政治顧問に迎え、官僚を意のままに動かし貴族勢力を抑えた。かれはニカイア総主教にアルセニオスを迎えたが、総主教をも皇帝の意に従わせた⁽⁵²⁾⁽⁵³⁾。またテオドロス2世は外交面でも積極的に活躍し、トルコとは講和を企画すると同時に、ブルガリアとは交戦したあと休戦条約を締結し、さらにエピルスとも婚姻関係を結び平和を維持した⁽⁵⁴⁾。しかしテオドロス2世は、ローマ教皇との関係において、1256年2名の使者をローマへ遣わし関係改善に努めたが、教皇が送った使者がマケドニアに入ると、かれらを追い返してしまった。これはテオドロス2世がコンスタンティノポリスを奪回した時に、ローマ教皇の権力が東方へ入るのを防ぐための措置でもあった。⁽⁵⁵⁾

こうした経緯のあと、テオドロス2世は治世4年足らずで1258年8月、36才の若さで死亡した⁽⁵⁶⁾。テオドロス2世には妻ヘレナとの間に、イレネ、マリア、ヨハネス、テオドラ、エウドキアの一男四女の子供がいた。そのなかで息子が父の後を継ぎ、ヨハネス4世ラスカリスとして同年8月即位した。こうして皇帝位は親から子へ、血統相続の形で伝った。⁽⁵⁷⁾

しかしヨハネス4世は、1250年頃の生まれといわれ、即位当時7才の少年で

あった。⁽⁵⁸⁾そのため皇帝に政権担当・運営の能力はなく、当然ここに後見役が必要となった。実はこの時後見役の人選をめぐり、ニカイアの宮廷で紛争がおこった。はじめテオドロス2世の信任が厚かったゲオルギオス・ムザロンが、ヨハネス4世の後見役に選ばれた。⁽⁵⁹⁾ところがテオドロス2世時代に抑圧されていた貴族はムザロンの就任に批判的であった。そのなかでもっとも代表的なのはバライオロゴス家のミカエルであった。このミカエルは、テオドロス2世時代に皇帝のブルガリア遠征中に、一時期政権を預ったが、その間にイコニウムのトルコ側宮殿へ脱出するという一幕もあり、またテッサロニカへ配属され当地の支配に当たった時もエピルス軍に攻撃され、そのためマケドニア西部を1257年に奪われ、ニカイアへ戻ったあと投獄された。⁽⁶⁰⁾そしてテオドロス2世死亡後9日目に挙行された皇帝追悼式典の日、ムザロンと弟は教会で襲われ、祭壇の前で殺された。⁽⁶¹⁾そのあとミカエルが実質上の後見人になった。

ミカエルは、皇帝家との間に家系上のつながりをもっていた。すなわちさきの皇帝ヨハネス3世ドゥカス・ヴァタツェスの弟イサキオスの孫娘テオドラは、ミカエルの妻であった。またミカエル自身アレクシオス3世アンゲロスの曽孫にあたっていた。したがってミカエルの所属したバライオロゴス家は、当時ニカイアにおいては著名な家柄のひとつであった。⁽⁶²⁾とくに皇帝家とのつながりをもっていたことが、ミカエルを有利に導いたと思われる。その結果ミカエルは、1258年末あるいは翌年初め、ヨハネス4世の副帝についた。⁽⁶³⁾

したがって今回ニカイア帝国の皇帝位は、テオドロス2世からヨハネス4世へ、つまり親から息子へ相続されたのであり、その交替そのものには問題はなかった。しかしヨハネス4世が少年であったため、後見役をめぐる問題がおこった。すなわちムザロンとミカエルの相違は、その身分にあった。ムザロンはその出生と生いたちについては詳しくないが、卑賤の出身であるといわれる。⁽⁶⁴⁾しかし前帝テオドロス2世に認められ、帝の有力な助言者になった。これも文人皇帝テオドロス2世が、家臣団をその身分の貴賤を問わず本人の才能と実力によってとりたてたためにおこったものである。つまりムザロンは自分の実力によって、皇帝の側近にまで出世したのである。こうした実力本位のムザロンに対して、コンスタンティノポリス時代以来の高い身分を誇るニカイア帝国の貴族層が批判的な態度をとったのは、ある意味では当然であった。その貴族層の代表格として、皇帝家と家系上つながりのあるバライオロゴス家のミカエルが現われたのである。このように考えてくると、1258年のニカイア帝国では、

コンスタンティノポリス時代以来の貴族層の存在が強固であり、政権運営においても新進の成り上り者を排除する傾向がみられた。換言すれば当時のニカイア帝国においては、身分上昇ないしは社会的流動性にもある種の限界があったといえよう。

そしてこの時代において、ラスカリス家の皇帝位を守るのは前皇帝ないしは前王朝と家系上のつながりのある者に限る、という観念が強く表面に出されたともいえる。実際ミカエルは、この時よりニカイア帝国の政権を握り、ヨハネス4世の存在を形だけのものにしてしまった。

V. ヨハネス4世ラスカリスよりミカエル8世パライオロゴスへ (1261年)

ミカエル8世パライオロゴスは、ヨハネス4世ラスカリスの副帝に即位したあと、ただちに同じギリシア人の国家エピルス専制国を打倒するため、1259年3月クマン人やセルジュク・トルコ人を含む軍団を組織し、それをまずテッサロニカに向かわせた。そこでエピルス側のミカエルのひきいる軍団を脅し、これをアルバニアの山中に追い込んだ。エピルスのミカエルは、一時期シチリアのマンフレッドの支援を受けてニカイア軍に抵抗したが、1259年夏(7月か)⁽⁶⁵⁾ペラゴニアの戦いに敗れた。そしてニカイア軍はエピルスの首都アルタに入った。その後ミカエル8世は、テッサロニカの統治を兄のヨハネスに委ね、他方ではトルコ、モンゴル、ブルガリアなどと相次いで1260年に同盟を結び、コンスタンティノポリス奪回の準備を進めた。とくに1261年3月13日ミカエル8世は、ジェノヴァと同盟を結び、ジェノヴァ商人にレバント貿易の特権を与え、その見返りとしてニカイア帝国への経済的協力を求めた。⁽⁶⁶⁾

その後ミカエル8世は、コンスタンティノポリス奪回の準備をさらに進め、1261年7月初め将軍アレクシオス・ストラテゴプロスをトラキアへ派遣した。かれはわずかな兵士をひきいていたが、トラキアで農民からコンスタンティノポリスの防衛が手薄になっているとの情報を得た。というのはコンスタンティノポリスの守備兵は、当時黒海北沿岸防衛のためビスニア沖のダフヌシア島攻撃に出陣していた。そこでアレクシオスは、7月25日コンスタンティノポリスへほとんど無抵抗で入った。⁽⁶⁷⁾ラテン帝国皇帝ボードゥワ2世は、この事態を知り、ただちにヴェネツィア商船に乗り、エウボエアへ逃れた。ミカエル8世はメテリオンでこの情報を受けたが、8月15日コンスタンティノポリスへ入った。⁽⁶⁸⁾そしてかれは総主教アルセニオスから改めて戴冠された。なおヨハネス4世は、

ニカイアに留まっていたが、2・3ヵ月後に盲目にされた。⁽⁶⁹⁾

したがって1261年8月15日以降「皇帝の在所」は、ふたたびコンスタンティノポリスに移ったが、その皇帝の座はミカエル8世が独り占めることになった。ここに皇帝位はヨハネス4世からミカエル8世へ交替したといえよう。今回の皇帝交替の意味を考えるにあたり、次の2つのことに注意しなければならない。

第1は、皇帝としての実績の差である。前述のとおりヨハネス4世は即位当時7才であり、1261年においてもわずか11才の少年であった。そのためかれは皇帝としてはまったく実績を残していなかった。それに対しミカエル8世は、ヨハネス4世の後見役に就くまでに軍人として活動しており、副帝に即位したあとも、ニカイア帝国の対抗者エピルス専制国を打倒し、ついにコンスタンティノポリス奪回を果たした。とくにコンスタンティノポリス奪回は、1204年以来ラスカリス王朝の夢であり、従来の皇帝もいく度か試みたが果し得なかったものである。それをミカエル8世がなしとげたのであるから、かれへの評価は高まるばかりであった。そしてミカエル8世は、コンスタンティノポリスで総主教としてのアルセニオスからあらためて戴冠されたのであるから、かれの皇帝としての地位はいっそう堅固なものになった。

第2は、ミカエル8世がヨハネス4世を盲目にしたことである。コンスタンティノポリスが奪回された時点で、ニカイアにおけるヨハネス4世とコンスタンティノポリスにおけるミカエル8世の2人の皇帝が存在したことになる。そして前者はラスカリス家であり、後者はパライオロゴス家の出身者であった。するとここに皇帝はラスカリス家とパライオロゴス家のいずれに所属するのか、という問題があらたにおこる。しかも帝国領域の面からみると、ニカイア帝国の名で呼ばれた小アジア西部はラスカリス家の支配下にあったので、ミカエル8世がコンスタンティノポリスを奪回したとはいえ、その領域はそれまでのラテン帝国の領域すなわちコンスタンティノポリスとその西側近郊地域ということになる。したがってこの時点で帝国は、ニカイアとコンスタンティノポリスに皇帝をもつ二眼性国家となった。しかもミカエル8世にとっては将来ヨハネス4世側からの反撃が予想されるので、それを未然に防ぐ必要があった。そこでミカエル8世は、あえてヨハネス4世を盲目にして廃位させ、ラスカリス家側よりパライオロゴス家への反抗を断ち切ったのである。つまりヨハネス4世の盲目は、この時をもって皇帝位がラスカリス家からパライオロゴス家に移ったことを意味する。

ミカエル 8 世のコンスタンティノポリス奪回は、たしかにラスカリス王朝の悲願であったが、それが他の家系の者によって果されたので、ラスカリス王朝を終らせてしまった。

結 語

叙上のとおり、1204年から1261年までニカイア帝国を統治したラスカリス王朝において 5 回みられた皇帝交替の事例を考察してきた。

この皇帝交替をふりかえってみると、まずラスカリス家の皇帝位家系連続が交替の基本的姿勢であったと思われる。その姿勢は次の 3 つの面でみられた。すなわち第 1 は、皇帝位の血統相続である。これはコンスタンティノス 11 世からテオドロス 1 世への兄弟相続、ヨハネス 3 世からテオドロス 2 世を経てヨハネス 4 世に至る親・子・孫の相続にみられた。いうまでもなく皇帝位とは、帝国における最高の位である。したがって新しく皇帝になる者には、前皇帝の血を引く者、すなわち皇帝の息子あるいは兄弟がもっとも高貴な者として適任と考えられる。その意味でニカイア帝国においても、ラスカリス家の一族があい次いで皇帝位を継承したのである。第 2 は、縁組による皇帝位継承である。これはテオドロス 1 世からヨハネス 3 世への皇帝交替の時にみられた。すなわちヨハネス 3 世が即位できたのは、テオドロス 1 世の娘イレネの夫であったためである。ただこの場合テオドロス 1 世の弟アレクシオスとイサキオスの側からヨハネス 3 世の即位に対する反抗があった。しかもその反抗はラテン帝国をもまきこむものであったが、結局鎮圧された。この反抗はさきのテオドロス 1 世の即位にみられた血統相続の立場からみると、皇帝位がラスカリス家の外部から来た人物に移るのに対しておこったと思われる。第 3 は、前王朝との家系連続である。テオドロス 1 世は、その即位当時前王朝のアンゲロス家のアレクシオス 3 世の二女アンナと結婚していた。したがって 1205 年の時点でラスカリス王朝はアンゲロス王朝とつながる結果となった。こうして血統相続、縁組相続をもってラスカリス王朝は自己家系内で皇帝位を連続させたが、また前王朝とも家系上の連続を保っていた。

ニカイア帝国において皇帝位をラスカリス家系内で継承させたのには、総主教と貴族層の存在を忘れてはならない。従来コンスタンティノポリスでは、その総主教が新皇帝に戴冠する慣例があった。しかし 1205 年テオドロス 1 世が即位した時ニカイアには総主教がなかった。そこで帝は 1208 年ミカエル 4 世をニ

カイアに迎えて総主教とし、それよりあらためて戴冠された。このことによってニカイア帝国は従来のビザンティン帝国との連続性を主張することができた。また貴族層の皇帝交替における役割はそれほど積極的には表われなかったが、ただヨハネス4世の後見役をめぐる紛争にはその存在が知られた。すなわち最初の後見人ムザロンに貴族層が批判的であったのは、卑賤の出身者を皇帝の側近から排除するためであり、その批判の極点はムザロンの暗殺となった。そのあと皇帝家とつながりのあるパライオロゴス家のミカエルがヨハネス4世の後見役に就いた。

しかしそのミカエルは、ヨハネス4世の後見役に就いたあと副帝になったが、1261年念願のコンスタンティノポリスを奪回すると、ヨハネス4世を廃してみずから単独皇帝となった。この行為は、それまで続いたラスカリス家における皇帝位の家系連続を断絶するものであった。

これを要するにラスカリス王朝は、コンスタンティノポリスを追い出されて形成したとはいえ、前王朝アンゲロス家との家系上の連続とニカイアにおける総主教座の設置などによって、それまでのビザンティン帝国との連続性がまず指摘される。その後皇帝位はラスカリス家系内で継承されたが、それを可能にしたのは総主教による戴冠と貴族の支持であった。しかし皇帝位がふたたびコンスタンティノポリスで樹立されると、もはやニカイアにおける皇帝位は無用のものとなり、ラスカリス王朝は断絶した。結局ラスカリス王朝は、第4回十字軍避難のための亡命王朝であった。

略語表

- B. *Byzantion* (Paris, Liège 1924–1929; Paris, Brussels, 1930; Brussels, 1931–).
BZ. *Byzantinische Zeitschrift* (Leipzig, 1892–).
CFHB. 11, *Corpus Fontium Historiae Byzantinae* 11, (Berlin, 1975).
CMH. IV–1, *The Cambridge Medieval History* IV–1 (Cambridge, 1966).
CSHB. 6, *Corpus scriptorum historiae Byzantinae* 6, (Bonn, 1829).
DR. F. Dölger, *Regesten der Kaiserurkunden des oströmischen Reiches von 565–1453*.
WBD. *Webster's Biographical Dictionary* (Massachusetts, 1943, 1972).

注

- (1) A. A. Vasiliev, *History of the Byzantine Empire 324–1453*, Madison, 1952. G. Ostrogorsky, *History of the Byzantine State*, trans. by J. Hussey, New Brunswick, 1969.

- (2) E. H. McNeal and R. L. Wolff, "The Fourth Crusade", ed., K. M. Setton, *A History of the Crusade*, Madison, 1969, vol. II, p. 182.
- (3) B. Sinogowitz, "Über das Byzantinische Kaisertum nach dem Vierten Kreuzzuge (1204-1205)" BZ. Vol. ILV, 1952, p. 352. 渡辺金一『コンスタンティノープル千年——革命劇場——』岩波新書 1985年, 56—57頁。
- (4) D. M. Nicol, "The Fourth Crusade and the Greek and Latin Empires 1204-61", CMH, IV-1, pp. 275-330.
- (5) P. Charanis, "The Slavic Element in Byzantine Asia Minor in the Thirteenth Century", B. Vol. XVIII, 1948, pp. 69-83.
- (6) H. G. Ahrweiler, "La politique agraire des empereurs de Nicée", B. Vol. XXVIII, 1958, pp. 51-66.
- (7) A. Andreva, *Očerki po Kulture vizantiskago dvorav XIIIv*, Prag, 1927.
- (8) G. Ostrogorsky, *op. cit.*, pp. 418-422.
- (9) *Nicetae Choniatae Historia*, recensuit. Ioaness Aloysius van Dieten, CFHB 11, Berlin, 1975. *O City of Byzantium Annals of Niketas Choniates*, trans. by H. J. Magoulias, Detroit, 1985. (Annals of Niketas Choniates と略記)。
- (10) *Nicephori Gregorae Byzantina Historia*, cura Ludovici Schopeni, CSHB 6, Bonn, 1829.
- (11) *Nictae Choniatae Historiae* CFHB. 11, pp. 601-602; Annals of Niketas Choniates, pp. 330-331.
- (12) Ibid., CFHB. 11, p. 626; Annals of Niketas Choniates, p. 343.
- (13) D. M. Nicol, *op. cit.*, CMH. IV-1, p. 295. G. Ostrogorsky, *op. cit.*, p. 428.
- (14) A. A. Vasiliev, *op. cit.*, p. 507.
- (15) CMH. IV-1, p. 796.
- (16) *Nicetae Choniatae Historia*, CFHB. 11, p. 508; Annals of Niketas Choniates, p. 280.
- (17) 杉村貞臣「アモリア王朝の皇帝交替問題」『人文論究』第34巻第1号, 1984年, 60頁。
- (18) 杉村貞臣「マケドニア王朝の皇帝交替問題」『人文論究』第37巻第3号, 1987年, 3頁。
- (19) *Nicetae Choniatae Histoira*, CFHB. 11, p. 626; Annals of Niketas Choniates, p. 343.
- (20) W. Ensslin, "The Government and Administration of the Byzantine Empire", CMH. IV-II, p. 3.
- (21) D. M. Nicol, *op. cit.*, CMH. IV-I, p. 295.
- (22) *Nicetae Choniatae Historia* CFHB. 11, p. 633; Annals of Niketas Choniates, p. 347.
- (23) A. A. Vasiliev, *op. cit.*, p. 511, n. 19. D. M. Nicol, "Kaiser salbung. The Uction of Emperurs in Late Byzantine Coronation Ritual", *Byzantine and Modern Greek Studies* Vol. II, Oxford, 1976, p. 39.
- (24) D. M. Nicol, "The Fourth Crusade and the Greek and Latin Empires 1204-61", CMH. IV-I, p. 300.

- (25) G. Ostrogorsky, *op. cit.*, p. 430, n. 2. 3.
- (26) DR, III, p. 7, [1703].
- (27) DR, III, p. 1, *Nicephori Gregorae Byzantina Historia*, II, 1, CSHB. 6, p. 24, 1.
- (28) DR, III, p. 8, *Nicephori Gregorae Byzantina Historia*, II, 1, CSHB. 6, p. 24, 12.
- (29) G. Ostrogorsky, *op. cit.*, p. 429, n. 3.
- (30) Ibid., p. 430.
- (31) *Nicephori Gregorae Byzantina Historia*, II, 1, CSHB. 6, p. 24, 3.
- (32) WBD, p. 784.
- (33) WBD, p. 1458.
- (34) A. A. Vasiliev, *op. cit.*, p. 508. G. Ostrogorsky, p. 434.
- (35) D. M. Nicol, *op. cit.*, CMH. IV–I, p. 308.
- (36) *Nicephori Gregorae Byzantina Historia*, II, 1, CSHB. 6, p. 25, 1–21.
- (37) G. Ostrogorsky, *op. cit.*, p. 435.
- (38) Ibid., pp. 434–444. H. G. Ahrweiler, *op. cit.*, B. Vol. XXVIII, 1958, pp. 135–136.
- (39) A. E. Laiou-Thomadakis, “The Byzantine Economy in the Mediterranean Trade System; Thirteenth-Fifteenth Centuries”, *Dumbarton Oaks Papers*, Vol. XXXIV–XXXV, 1980, p. 178.
- (40) DR, III, p. 8.
- (41) G. Ostrogorsky, *op. cit.*, p. 444.
- (42) *Nicephori Gregorae Byzantina Historia*, II, 8 CSHB. 6, p. 50, 20–21.
- (43) D. M. Nicol, *op. cit.*, CMH. IV–I, p. 321, n. 1.
- (44) A. Heisenberg, “Kaiser Johannes Batatzes der Barmherzige”, BZ. Vol. XIV, 1905, 160–233.
- (45) *Nicephori Gregorae Byzantina Historia*, II, 8, CSHB. 6, p. 51, 1–2. DR, III, p. 25.
- (46) *Nicephori Gregorae Byzantina Historia*, III, 1, CSHB. 6, p. 53, 2.
- (47) Ibid., II, 2, CSHB. 6, p. 25, 11.; II, 5, CSHB. 6, p. 35, 15.
- (48) Ibid., II, 7, CSHB. 6, p. 45, 4–15. D. M. Nicol, *op. cit.*, CMH. IV–I, p. 316.
- (49) D. M. Nicol, *op. cit.*, CMH. IV–I, p. 316.
- (50) Ibid., p. 320.
- (51) P. N. Papageorgiu, “Zu den Briefen des Theodoros Laskaris”, BZ, Vol. XI, 1902, pp. 16–32.
- (52) G. Ostrogorsky, *op. cit.*, pp. 444–445.
- (53) A. A. Vasiliev, *op. cit.*, p. 544.
- (54) G. Ostrogorsky, *op. cit.*, p. 446.
- (55) D. M. Nicol, *op. cit.*, CMH. IV–I, p. 323.
- (56) *Nicephori Gregorae Byzantina Historia*, III, 2, CSHB. 6, p. 61, 19–20. DR, III, p. 25, G. Ostrogorsky, *op. cit.*, p. 446.
- (57) *Nicephori Gregorae Byzantina Historia*, III, 2, CSHB. 6, p. 62, 19–22. DR, III, p. 29.
- (58) WBD, p. 784. G. Ostrogorsky, *op. cit.*, p. 446.

- (59) *Nicephori Gregorae Byzantina Historia*, III, 2, CSHB. 6, p. 62, 3–19.
- (60) *Ibid.*, III, 2, CSHB. 6, pp. 57–59.
- (61) *Ibid.*, III, 3, CSHB. 6, p. 65, 23.
- (62) V. Laurent, “La Généalogie des premiers Paléologues”, B. Vol. VIII, 1933, pp. 130–146.
- (63) *Nicephori Gregorae Byzantina Historia*, IV, 1 CSHB. 6, p. 78, 2–3.
- (64) G. Ostrogorsky, *op. cit.*, p. 445.
- (65) D. M. Nicol, “The Date of the Battle of Pelagonia”, BZ. Vol. ILIX, 1956, p. 71.
- (66) D. M. Nicol, “The Fourth Crusade and the Greek and Latin Empires 1204–’61,” CMH. IV–I, p. 326.
- (67) G. Ostrogorsky, *op. cit.*, p. 449.
- (68) *Nicephori Gregorae Byzantina Historia*, IV, 2 CSHB. 6, pp. 86–87.
- (69) *Ibid.*, IV, 4, CSHB. 6, pp. 92–93.